

日本学士院賞 受賞者 清水 展



略歴	生年	専攻学 目	文化人 類学
昭和四九年	三月	昭和二六年	六月
同 五一年	三月	同 五一年	三月
同 五四年	六月	同 五四年	六月
同 五五年	四月	同 五五年	四月
同 六〇年	四月	同 六〇年	四月
同 六二年	二月	同 六二年	二月
平成 六年	三月	平成 六年	三月
同 六年	七月	同 六年	七月
同 一八年	一〇月	同 一八年	一〇月
同 二二年	四月	同 二二年	四月
同 二九年	一月	同 二九年	一月
同 二九年	四月	同 二九年	四月

東京大学教養学部教養学科卒業
 東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
 アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所客員研究員
 東京大学教養学部助手
 東京大学東洋文化研究所助手
 九州大学教養部助教授
 社会学博士
 北京外国語大学・北京日本学研究中心客員教授（平成七年七月まで）
 九州大学大学院比較社会文化研究院教授
 京都大学東南アジア研究所教授
 京都大学東南アジア研究所長（平成二六年三月まで）
 京都大学東南アジア地域研究研究所教授
 京都大学名誉教授

社会学博士清水 展氏の『草の根グロー
バリゼーション―世界遺産棚田村の文化
実践と生活戦略』に対する授賞審査要旨

本書『草の根グローバリゼーション―世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』京都大学学術出版会、二〇一三年一月）はフィリピン北部山地のイフガオ州のハバオ村において、一九九〇年代から進められてきた植林運動と社会開発に関して諸側面を総合的に考察した人類学の成果である。この二〇年の間にグローバル化の波が急速におしよせ、村人たちはその波に対峙し、便乗したり、積極的に利用しながら、生活を守り、あるいは向上させようと奮闘している。全体として、このような僻地の村において「グローバリゼーション」といわれるものが、実際どのような契機、方向性をもってみられるか、外からのみでなく、内からの力のあなどりがたいことを明らかにしている。

清水 展氏の考察の中心は、一九九八年であるが、十数年来親交のあった知己のハバオ村の植林運動のリーダーであるロペス・ナウ

ヤックの来歴と仕事への熱意について、それともう一人の知己、映像作家キッドラット・タヒミックがナウヤックを主人公とした詳細なドキュメンタリーの記録などによって、過去二〇年間の推移を詳細に知ることができる。ナウヤックはハバオ村の出身（一九三八年生）で、村の小学校から隣町の高校を卒業後、バギオ市（アメリカ植民とともに二〇世紀初頭に建設された北ルソンの高原都市）に出て、働きながら夜間大学に通うも経済的理由で中途退学。しかし人望があり、バギオの先住民が集中して住んでいるバランガイの役員におされ、後にその村長、区長をつとめた。しかしながら、ナウヤックは彼ら自身の生活にとつて、植林の重要性を強く認識するにいたって、一九九七年、その余生を植林運動につくすことを決意し、出身地のハバオ村に居を移し、熱心な植林運動のリーダーとして活躍してきた。他方キッドラットはバギオの裕福な家庭の長男として生まれ（一九四二年）、エリートの子弟として英語教育を受け、アメリカの大学にも留学、後にはパリのOECD本部の国際公務員として職を得、順風満帆の人生航路を歩んだが、本当のフィリピン人としての自覚にめざめ、フィリピンにもどり、きわめて意識的に自己再構築を目ざし、ナウヤックに導かれ、イフガオ文化の中に映像の仕事をとおして、フィリピン人としてのアイデンティティを模索している。

この二人の存在は著者にとって、この研究の重要な契機となっており、彼ら二人の個々の来歴ならびに仕事の内容、現在にいたる貢獻は、本書の第一部を構成し、全体の三分の一ほどの頁数を占めており、さらに後述の諸論の中でも彼らの言動にしばしばふれられている。

第二部では、先行する多くのイフガオに関する民族誌の紹介と批判が述べられている。著者によると（一八九頁）イフガオという名称は、もともと北部ルソン・コルディレラ山岳地帯の一地域に住む民族およびその言語を指し、一九六六年にひとつの州として独立し、現在にいたる。このイフガオは壮麗な棚田群を有すること、伝統的な文化をよく維持してきたことなどにより、とりわけアメリカ植民地時代に入ってから、アメリカ人行政官や人類学者たちを魅了し、フィリピンの諸先住民たちの中でも群をぬいて多くの調査研究がされてきた。

さらにこの第二部においては、イフガオも少なからず影響を受けたスペイン、アメリカの支配、この地で悲惨な敗戦を迎えた日本軍、さらにマルコス時代をとおり今日にいたる歴史的推移の紹介がなされている。

第三部は、村人たちの経済生活のあり方についてである。伝統的な棚田農業と現金収入源としての木彫り工芸、そして海外出稼ぎと

伝統の復活について述べている。とくに海外出稼ぎについては詳しく、それは村の総人口の約一割であり、海外就労者一四九名の行き先は二七ヶ国にも及ぶという。就労に関する経緯について著者自身直接聞き取りもした一六件について個々の具体例を報告している。なかには高学歴の者、裕福な、また有力者の家族の者などもある。一九九〇年代から海外出稼ぎが顕著になる一方で、伝統文化の関心とイフガオであることの自覚が高まってきており、そのひとつの表れが現代版のトゥゴ（伝統祭礼）をはじめたことである。

第四部では人類学者として、まきこまれざるを得なかった協力（ICAへの援助費の申請など）をはじめ、国際協力の実情に関する諸問題が扱われている。

人類学者の研究対象へのコミットメントについては、著者の場合、既に十分な経験をしている。一九七〇年後半、はじめてフィールドワークをしたルソン島西部のピナトゥボ山一帯が、一九九一年六月に生じた二〇世紀最大の火山噴火によって激甚災害を受けた際、先住民アエタの人々の生活再建に協力したことである（本書三六九頁「私自身の関与―ピナトゥボからイフガオへ」を参照）。また著者の『噴火のこだま―ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』（九州大学出版会、二〇〇三年）はその再建をめぐる民族誌である。

本書全体にわたって、充分過ぎる程の詳細なデータの蓄積とその解釈の妥当性は、本書が今日の社会人類学研究のひとつの到達点を示しているものであるといえよう。このような成果をえられたのは、一九七〇年代以来、著者がずっとフィリピンにかかわってきた長年のフィールドワークならびに、それらを含むフィリピン社会の理解の深さ、広さに負うところも大きい。そのため本書においては、対象コミュニティと隣接地域ならびに全体社会との位置づけもよくわかる点、さらに被調査対象と研究者が人間として等身大の関係にたつて、第一部にみられたように、個人の生きざまを深く考察している点など、今までの個別研究にない深さと広さをもたらしている。本書はイフガオ研究でありながら、把握することの容易でない多言語集団からなり、外から大きな影響を受けてきた複雑な歴史をもつフィリピン社会というものの一端を推測できる好著であるといえよう。

主要業績

著書

Pinabuo Ayus: Continuity and Change, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1989.

『出来事の民族誌—フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』九州大学出版会、一九九〇年二月。

『文化のなかの政治—フィリピン「二月革命」の物語』弘文堂、一九九一年五月。

The Orphans of Pinabuo: Ayta Struggle for Existence, Manila: Solidaridad Publishing House, 2001.

『噴火のこだま—ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』九州大学出版会、二〇〇三年三月。

『草の根グローバルゼーション—世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』京都大学学術出版会、二〇一三年一月。

論文(抄)

「Mt. Pinabuo 南西麓ネグリート社会における結婚と婚資—集団構成の変容をめぐる」『民族学研究』四六卷一号、一九八一年六月、二五—五四頁。

「Mt. Pinabuo ネグリオートの経済生活—定着犁耕農業プロジェクトの成否とその影響を中心として」『東洋文化研究所紀要』八七冊、一九八一年一月、一四五—一九六頁。

「変容するネグリート社会の苦悩—ある若者のアモック事件をめぐる」『東洋文化』六三号、一九八三年三月、二七—六一頁。

「精霊との交流—ピナトゥボ・ネグリオートの治病セアンス」江淵一公、伊藤亜人(編)『儀礼と象徴』九州大学出版会、一九八三年五月、三二五—三五六頁。

「Filipino Children in Family and Society」Noboru Kobayashi & T.B. Brazelton (eds.) *The Growing Child in Family and Society*, University of Tokyo Press, 1984, pp. 95—112.

「採集狩猟民社会の変貌—歴史のなかのピナトゥボ・ネグリート」大林太良(編)『民族の世界史 6 東南アジア』山川出版社、一九八四年五月、四三七—四六一頁。

「剥奪と慰撫—Bandit(婚資)の意味をめぐる」『東洋文化研究所紀要』九六冊、一九八四年十一月、一二九—二六七頁。

『変化と持続―ピナトゥボ・アエタ社会における出来事の受容をめぐる』
博士論文（東京大学大学院社会学研究科）一九八七年二月。

「双系社会と婚資―フィリピン焼畑民の事例から」伊藤亜人、関本昭夫、船
曳健夫（編）『現代の社会人類学 第二巻 儀礼と交換の行為』東京大
学出版会、一九八七年一〇月、三一―五四頁。

「マニラ近郊町における聖週間儀礼―キリスト受難の追体験をめぐる」『東
洋文化』六九号、一九八九年三月、二二九―二八〇頁。

「聖コリ―を待つ時間―アキノ政権誕生の底流」阿部年晴、伊藤亜人、萩原
真子（編）『民族文化の世界・下―社会の統合と動態』小学館、一九九
〇年四月、四一六―四四〇頁。

「農地改革下における農村開発政策の方向―フィリピンの事例より」『九大農
学芸誌』第四五巻 第三―四号、一九九一年七月、一五三―一六九頁。（福
井清一、原洋之助との共著）

「植民都市マニラの形成と発展―イントラムロス（城壁都市）の建設を中心
に」『東洋文化』七二号、一九九二年三月、六一―九三頁。

「再臨する宗教・再生するデモクラシー―フィリピン」『二月革命』とカトリ
シズム」田辺繁治（編）『アジアにおける宗教の再生―宗教経験のポリ
ティクス』京都大学学術出版会、一九九五年五月、四〇三―四一四頁。

「存亡の危機から民族の新生へ―ピナトゥボ・アエタの生存戦略」『民族学研
究』六一巻二号、一九九七年一月、二七―二九四頁。

「NGOと異文化共生―ピナトゥボ・アエタ開発援助の事例から」梶原景昭
（編）『講座・文化人類学』岩波書店、一九九七年三月、二一九―二四六
頁。

「開発の受容と文化の変化―現代を生きる先住民の居場所」川田順造他（編）
『講座・開発と文化Ⅰ』岩波書店、一九九七年一〇月、一五三―一七六頁。

「植民地支配の歴史を超えて―未来への投企としてのフィリピン・ナシヨナ
リズム」西川長夫他（編）『アジアの多文化社会と国民国家』人文書院、
一九九八年九月、一四八―一七一頁。

「グローバル化時代の田舎が進める地域おこし―北部ルソン山村と丹波山南
町をつなぐ草の根交流、植林、開発の取り組み」加藤剛（編）『国境を
越えた村おこし―日本と東南アジアをつなぐ実践』NTT出版、二〇〇
七年九月、一八三―二二三頁。

「自然災害と社会のリジリエンシー（柔軟対応力）―ピナトゥボ山大噴火（一
九九一）の事例から「創造的復興」を考える」佐藤孝宏他（編）『生存
基盤指数―人間開発指数を超えて』京都大学学術出版会、二〇一二年三
月、一六三―一九二頁。

「応答する人類学」山下晋司（編）『公共人類学』岩波書店、二〇一四年七月、
一九―三六頁。

「創造的復興とアジア市民社会の形成―フィリピン・ピナトゥボ山噴火で被
災したアエタ支援の経験から」『地域研究』一五巻一号、二〇一五年四
月、一〇四―一二〇頁。

「巻き込まれ、応答してゆく人類学―フィールドワークから民族誌へ、そし
てその先の長い道の歩き方」(第一―一回日本文化人類学会賞受賞記念論
文)『文化人類学』八一巻三号、二〇一六年二月、三九―四二頁。